

私は昭和18年、旧満州国北安省で生まれました。父は満蒙開拓団のお寺の住職として西本願寺（京都）から派遣された僧侶です。昭和19年2月、父に招集令状が来て出征しました。父は「自分達のような僧職にある者が招集されるということはもう終わりを意味するので、すぐ内地（日本）へ帰りなさい…」と言い残して出征したそうです。その言葉で母は父を見送った後、すぐに私を連れておむつのみを持って帰国しました。

母は熊本市の出身ですが、父が書いてくれた地図を頼りに父の実家（現南島原市有家町）へ帰ったそうです。母と私は二人で小さな部屋を借りて暮らすようになりました。その後、昭和20年4月に父、戦死との通知が届きました。そして昭和24年、私が6才の時に母は再婚しました。母は新しい戸籍になりましたが、なぜか私の戸籍は祖父母の所に残されたままでした。その後、第2人、妹1人が産まれましたが当然家族と私の姓は違い、妹が長女となっています。養父はやさしい人で私も皆と同じように可愛がってくれ、弟、妹達とも何の違和感もなく仲良く育ちました。

私は26才で結婚し、10年目にやっと子どもを授かりましたが、子どもが2才の時にシングルマザーとなり養父、母の元へ戻りました。弟、妹達はすでに家を出て両親2人だけだったので私の子どもが成人して家を出た後も両親と暮らし、2人の最期も看取りました。

戸籍上は親子になっていませんが、親子として生活してきた中で、戦死した実父の遺児として戦没者慰霊祭等、いろんな行事等にも参加、出席してきましたが、戦死した実父のことを自分から母に尋ねたり、また、母が私に話をしたりすることもあまりありませんでした。母は81才で亡くなりましたが、その母が死ぬ前、病気になってから戦死した父のことや満州のことをポツリポツリと話すようになったのです。

父の戦死通知が来た時に自分は実家（熊本）へ帰りたかった。が、藤原家（父の実家）の当主から帰りたければ子ども（私）を置いて自分だけ帰れと言われ帰れなかった。その後、父の従兄弟である養父の所へ行けと言われ、一緒になった。しかし、子ども（私）の籍は藤原家から抜いてくれなかった。と母は話してくれました。そして、自分（母）が死んだら、分骨して戦死した父の墓に一緒に入れて欲しいと、遺言として私に頼んだのです。

母が亡くなった後、養父、弟達の了解を得て分骨し藤原（実父）の墓に納めました。実父の骨つぼには骨は入っておらず名前を書いた木の札が入っているだけだそうですが、それでも一緒にの墓にと願う母の気持ちを考えると、自分からもっといろんなことを、父のことを聞いてあげれば良かったと悔やんでいます。

お見合い結婚し、わずか2年ばかりで戦争によって引きさかれ60年近くたって一緒にの墓に入れて欲しいと願う母の想いはどうだったのか。毎年8月15日、終戦記念日が近づくと戦争体験談や戦争について語り聞かされてきましたが、戦地へ恋人を、夫を、息子を、父を送ったまま二度と逢うことのかなわなかった女達、彼女達がその後どのような人生を送りどのような思いで生きてきたのか聞きたいと思う今、ほとんどの当事者は高齢化、また、亡くなっているのが現状です。彼女達の一生を知りたいです。

今、ロシアのウクライナ侵攻による悲惨な毎日をニュースで見聞きます。戦争を始めた

当事者は安全な場所にいて命令するだけで犠牲になるのは民間人、女、子ども達なのです。かつての日本軍も今のロシアと同じでした。「日本は神の国！絶対に負けない。勝っている！…」と国民に思わせ、真実は知らされず、数えきれない程の若い人達が特攻隊として片道燃料で飛び立って行ったのだそうです。

戦争は絶対にすべきではありません。私の率直な思いです。
母と私の体験から何かを感じ取ってもらえればと思い書きました。